文化史学概論小テスト（6 月 12 日実施）講評

課題：ギリシアの歴史家ヘロドトスは「歴史の父」と呼ばれている。そのように呼んだのはローマの政治家で弁論家のキケロである。しかしヘロドトスは「文化史の父」とも呼べるのではないかと思われる。「歴史の父」と呼ばれ、「文化史の父」と呼ばれ得る理由を書きなさい。その際「慣習（ノモス）こそ万物の王」というピンダロスの言葉を参考にしなさい。

講評：「歴史の父」か「文化史の父」のどちらか一つの課題しか論じていないものがあったし、両方扱っていてもどちらかを軽く、どちらかを重く論じるものも多かった。

「歴史の父」の理由としてペルシア戦争を人間の営為として記録に残し、忘却の世界から救い出そうとしたということを挙げているものが多かった。次いで神や神話を歴史から排除したというものも目に付いた。その反面、ペルシア戦争の原因を〈探求した〉という点に言及している答案は意外にも少なかった。

「文化史の父」の理由として〈慣習は万物の王〉というピンダロスの言葉を歴史は文化によって構築されているとか人の行動や判断は文化に基づいているという論を展開している答案が多かった。或いは文化人類学の立場から文化とは人間活動の総体を含んでいるという立場からヘロドトスを評価するものも多かった。この言葉の裏に今日の多文化主義的な視点がヘロドトスにあるという答案は少なかった。

配点：本小テストは 25 点満点としている。